OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	指標詞「私」の還元不可能性
Author(s)	重田, 謙
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2010, 50, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7519
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

指標詞「私」の還元不可能性

重　田　　謙

自然言語においては文脈依存的な重要な表現がある．「これ」「あれ」などの指示詞（demonstratives），「私」「今」「ここ」などの指標詞（indexicals）がその主たるものである．それらは文脈依存的であるという特徴を共有しているのだが，重要なのはそれらの相互連関と差異の探究にこそあると思われる．本論では，しかし，その探究の予備的な研究として指標詞「私」に焦点を絞って考察したい．

指標詞「私」の論理を最も精密に探究した哲学者の一人が，H. N. カスタニェダである．そして指標詞「私」に関する彼の主張で最も重要なものの一つは，還元不可能性テーゼである．それは，おおまかに言えば，指標詞「私」を，それを含まない表現に分析しそれに還元することは不可能だという主張である．本論では，この還元不可能性テーゼを擁護する可能なかぎり説得的な議論の提示を試みる．

本論では次の構成で議論を展開する．まず，指標詞「私」を含む知識の，言表知識（knowledge *de dicto*）への還元不可能性をカスタニェダの議論に依拠して簡潔に確認する（§Ⅰ）．つぎに，指標詞「私」を含む知識を事象知識（knowledge *de re*）に還元するJ．ヒンティカの認識論理とそれに対するカスタニェダの批判を検討する（§Ⅱ）．ここでは，事象知識の成立は指標詞「私」を含む知識の十分条件でも必要条件でもありえないことをカスタニェダの議論を補足および修正しながら論証することを試みる．引き続く§Ⅲでは，カスタニェダとヒンティカの論争においては直接議論の対象とならなかった種類の事象知識を主題的に検討する．そして指標詞「私」を含む知識は，この種類の事象知識にも還元不可能であることを論証したいと思う．

この議論から，指標詞「私」には指示対象が存在しえないというテーゼを導出できるだろう[1)]．逆説的なこの結論は，しかし，指標詞「私」についての日常的な言語実践によって明白に支持されているのである．つまり指標詞「私」はこの逆説的な結論を伴なうことによってはじめて成立すると言えるのである．

§I　カスタニェダの還元不可能性テーゼ[2)]

カスタニェダは，指標詞「私」ではなく，それに対応する自己知識を帰属する三人称言明をもっぱら分析の対象とする[3)]．

（1） 雑誌『魂』の編集長は，彼（自身）が富豪であることを知っている．
The Editor of *Soul* knows that he (himself) is a millionaire.

この例において，雑誌『魂』の編集長に自己知識を帰属する三人称代名詞「彼（自身），he (himself)」を，カスタニェダは「彼*，he *」と表記する[4)]．この「彼*」には次の特徴がある．(i)「彼*」は，その言明の発話者によってなされる指標的な指示を表現しない．例えば，(1）と次の言明

（2） アンソニーは，私が富豪であることを知っている．
Anthony knows that I am a millionaire.

は，どちらもプリヴァトゥスによって発話されたものとしよう．(2）における指標詞「私」は，プリヴァトゥスによってなされた彼自身に対する指示であるのに対して，(1）の指標的な指示「彼*」は，プリヴァトゥスによってなされたものではない（(1）のトークン「彼*」を使用したのはもちろんプリヴァトゥスであるが)．(ii)「彼*」は間接話法（*oratio obliqua*）に現れる．(iii)「彼*」には，それが前方照応する（refer back）先行詞，「雑誌『魂』の編集長」，がある．(iv）その先行詞は，「彼*」を含む間接話法の外に位置する．(v）「彼*」は，雑誌『魂』の編集長に，いわば，陰伏的な指標的指示を帰属するために使用される．つまりもし編集長が彼の知っていることを主張しようとするならば，プリヴァトゥスが（1）を発話する際に「彼*」を使用したところを，彼は一人称代名詞「私」を用いて，

（3） 私は富豪である．

と主張するということである．

この特徴（i)（v）によって「彼*」は通常の指標詞から区別される[5)]．カスタニェダは，「彼*」を一人称代名詞「私」に対応する準－指標詞（quasi-indicator)[6)] と名づける．そして，この準－指標詞「彼*」について次のような重要なテーゼを提示する．

［IT.0］（「彼*」の還元不可能性テーゼ）
準－指標詞「彼*」は，固有名，確定記述，指示詞，指標詞，量化子[7]によっては分析不可能である，あるいはそれらを使用した分析に還元不可能である．

このテーゼの論拠を，確定記述，固有名，指示詞（指標詞）の順に簡潔に確認していこう．まず（1）は，（1）の「彼*（彼（自身））」を，確定記述「雑誌『魂』の編集長」に置換した，

（4） 雑誌『魂』の編集長は，雑誌『魂』の編集長が富豪であることを知っている．

を含意することも，それによって含意されることもない．雑誌『魂』の編集長は，未公開の編集会議において自分が編集長に任命されたことをまだ知らないとしよう．そのとき，雑誌『魂』の編集長は，彼*が雑誌『魂』の編集長であることを知らない．そして，彼は，彼*が貧しいと思っており，一方新聞紙面で雑誌『魂』の編集長が200万ドル遺贈されたことを知った．この想定では，（4）は真であるが，（1）は偽である．また雑誌『魂』の編集長は，200万ドルの貯金が自分の銀行口座にあることを彼*が知っている一方で，彼*が編集長に任命されたことを知らず，一文なしのジョーンズ博士が雑誌『魂』の編集長のままだと信じているかもしれない．このとき（1）は真であるが，（4）は偽である．これと同型の想定は，雑誌『魂』の編集者と同一人物を指示する他のすべての確定記述について適用可能である．

次に（1）の主語と「彼*」を，雑誌『魂』の編集長の固有名，「ガスコン」に置換してみよう．ここでは各個人に重複することなく唯一の固有名が与えられている世界を想定してみる．そのとき，「ガスコン」という固有名を与えられる個人は，少なくとも一つの（可能）世界内にはただ一人しか存在しない．

（5） ガスコンは，彼*が富豪であることを知っている．
（6） ガスコンは，ガスコンが富豪であることを知っている．

しかし，この場合でも，ガスコンは，一時的な記憶喪失などで，彼*がガスコンであることを忘却してしまっているという想定は十分可能である．その想定下で，ガスコンが，彼*が巨額の資産を所有していることを知っている場合，（5）は真であるが，（6）は偽となる．また同じ想定下で，ガスコンが，ガスコンという名前の人物に巨額の遺贈があった事実を知る一方，彼*についてはあいかわらずの貧乏だと信じている場合は逆になる．

次に，（5）の「彼*」を指示詞「これ（この人）」に置換してみよう．

（7） ガスコンは，これ（この人）が富豪であることを知っている．
Gaskon knows that this (man) is a millionaire.

（7）で「これ（この人）」を用いて指示をするのは，（7）の主語，ガスコンではなく，その発話者，例えばプリヴァトゥスであることには注意が必要である．したがって，やはりガスコンが，発話者プリヴァトゥスが指示詞を用いて指示する人物と彼*とが同一であることを知らないということは可能である．そのとき，（5）は真でありながら（7）が偽であることも，またその逆も可能となる．そして，これと同型の議論が，準－指標詞と区別される，他の指示詞，指標詞にも妥当する．

以上の考察をまとめると，［IT.0］に次のような具体的表現を与えることができる．

［IT.1］（i）《雑誌『魂』の編集長は，彼*が富豪であることを知っている》が，それに対応する形式の言明《雑誌『魂』の編集長は，a が富豪であることを知っている》を含意するような，あるいは（ii）後者が前者を含意するような，準－指標詞「彼*」を含まない個体定項（individual constants）[8]「a」は存在しない．

§Ⅱ　還元不可能性テーゼの擁護ーＪ．ヒンティカの理論の批判

2-1. 言表知識 knowledge *de dicto* から事象知識 knowledge *de re* へ

［IT.1］を容認するとしても，「彼*」の還元不可能性テーゼには別の観点からの反論の余地がある．それは，知識を含む命題的態度全般の対象を，言表（*de dicto*）ではなく，事象（*de re*）とみなす見解である．たとえば（6）には，少なくとも二つの読み方が可能である．第一は，ガスコンは，「ガスコンが富豪である」という文が意味すること，フレーゲの用語で言えば，その文の思想（Gedanke）およびそれが真であることを知っている，という読み方である．第二は，ガスコンが，それがどのような個体定項によって指示されるにせよ，ガスコンという人物そのものについて「～は富豪である」という述語が適用されることを知っている，という読み方である．本論では前者の読み方と区別して，後者を次の形式で表現することにする[9]．

（8） ガスコンは，ガスコンについて，彼が富豪であることを知っている．
Gaskon knows of Gaskon that he is a millionaire.

事象知識の場合，命題的態度の主体（ガスコン）が，述語（「～は富豪である」）を帰属する

事象（ガスコン）をいかなる記述のもとで指示しているかについては無規定であるという顕著な特徴がある．固有名「ガスコン」と確定記述「雑誌『魂』の編集長」が，同一の対象を指示することを前提するとき，（6）と次の

（9） ガスコンは，雑誌『魂』の編集長が富豪であることを知っている．

は，ガスコンに異なった言表知識を帰属する．しかし，（8）と次の

（10）ガスコンは，雑誌『魂』の編集長について，彼が富豪であることを知っている．

は，ガスコンには同一の事象知識を帰属している．というのも，それらはガスコン自身が，ガスコン（＝雑誌『魂』の編集長）その人をどのような記述によって指示するかについては無規定であるという点においてまったく同等だからである．

知識を言表知識の枠組で考える限り「彼*」の還元不可能性を否定することはできない．なぜなら，ガスコンは，彼*がaであることを知らないかもしれないという想定はつねに可能であって，その意味において，言表知識において「彼*」と個体定項「a」は置換不可能であるからである．しかし，事象知識という観点の導入によってその困難を回避することができる．事象知識においては「彼*」との置換可能性を問題にする個体定項「a」を特定できないからである．そして，（5）は，（6）や（9）を含意することも，それらによって含意されることもないけれども，少なくとも（8）を含意することだけは自明であるように思われるのである．したがって「彼*」についての知識の事象知識への還元可能性には検討の余地があるように思われる．

2-2. 還元可能性（analyzability）の理論－ヒンティカ[10)]

ヒンティカは，彼が提唱する認識論理の形式的体系の中で「彼*」を事象知識に還元することを試みる．彼の体系では，個体定項をもった1階の関数計算を設定し，そこに作用子〈Ka〉が導入される．これは，《aは知っている》と読み，〈p〉が自由変項を含まない文を表すとき，〈Ka(p)〉は《aはpを知っている》と読む．そして，ヒンティカの還元可能性テーゼ［AT］は，

［AT］《aは，彼*$_{a1}$が……であることを知っている》は，《(∃x)(x = a & Ka (…x…))》として十全に分析可能である．

によって表現できる[11]．ヒンティカは，［AT］の分析項である存在量化言明について二つの解釈の可能性を提示する．〈f(x)〉が，対象領域に人物（persons）をもつ自由変項「x」をとる関数を意味するとして，二つの解釈は次のようになる．

(A) 〈(∃x)Ka f(x)〉は，《a はだれが f であるかを知っている》を意味している．
(B) 〈(∃x) Ka f(x)〉は，《a に知られていて，a が f であることを知っている人物が存在する》を意味している．

2-3. カスタニェダの批判（1）

カスタニェダはこの二つの解釈のそれぞれについて［AT］の批判を試みている．しかし，私見では，カスタニェダの［AT］批判の本質は，［AT］をより明確に次のように表現したほうが見やすくなる．

［AT′］《a は，彼$^{*}_{a1}$が……であることを知っている》のは，《(∃x)(x = a & Ka (…x…))》であるときそのときに限る．

二つの解釈に対するカスタニェダの批判は，この双条件法［AT′］のそれぞれの批判に対応しているのだが，まず，

［AT′1］《(∃x)(x = a & Ka (…x…))》→《a は，彼$^{*}_{a1}$が……であることを知っている》

に対する批判を検討しよう．それに先だってカスタニェダは，「クインタス」という名の人物の例を導入する[12]．クインタスは軍隊のテントで意識を喪失し，意識を回復する際に記憶喪失になる．そしてその後の数カ月で戦闘において英雄となり，戦闘に没入し，やがて人生における軍隊生活の挿話を完全に忘れ去ってしまう．のちにクインタスは，その英雄のあらゆる記事を研究し，彼（彼*ではなく，その英雄）が100回負傷した唯一の人物であることを発見する．そしてクインタスは，（彼にも知られないなんらかの謎めいた理由によって）その英雄の功績に魅せられて，その英雄について最も権威ある伝記を書きあげる．

この事例に［AT′1］の定式を適用すると次のようになる．

(11) (∃x)(x = 英雄 & $K_{英雄}$(x = 英雄)) → その戦争の英雄は，彼*が英雄であることを知っている[13]．

（11）を解釈（A）にしたがって読むと，

その戦争の英雄と同一であり，かつ英雄が，だれがその戦争の英雄であるかを知っている人が存在する　→　その戦争の英雄は，彼*が英雄であることを知っている．

となる．しかし，カスタニェダはクインタスについてこう述べる．「人物を同定するための規準の変動にかかわらず，もっともふつうの状況において，明らかにクインタスは，その英雄がだれであるかを，ほとんどの人よりずっとよく知っている．たとえクインタスが彼*が戦争の英雄であることを知らないとしても」[14]．要するにカスタニェダは，クインタスの事例を（11）に対する明白な反例とみなしているのである．

ヒンティカはそれに対して，クインタスの事例などでカスタニェダが依拠する知識（「知っている」）の規準が弱すぎるのであり，それを十分強めれば［AT′1］の妥当性を擁護できるという趣旨の反論をする．「カスタニェダは，［個体定項］h を現実世界に位置づけることができることなしに，だれが h であるかを知ることができるという，だれであるかを知ることについての［弱い］規準（a standard of knowing who）を前提している」[15]．「もし，h がだれが h であるかを知っているということが，彼に，現実の生身の個人（an actual flesh-blood individual）について彼が h であると語る能力を与えるならば，［［AT′1］の前件から後件への］その含意は成立する」（［］内引用者）[16]．これらの叙述によれば，ヒンティカが考える，だれが h であるかを知っていることに関する「強い」知識の規準とは，「h を生身の個人として現実世界に位置づけることを可能にする種類の知識」ということになるだろう．

もちろんカスタニェダは，「クインタスは，現実の英雄の現実の功績についての入念な研究によって，現実の生身の個人について，彼（彼*ではなくその個人）が英雄だと語る能力を獲得している」[17]のであり，したがってヒンティカが要請する「強い」知識の規準を満足している，と再反論するのである．

2-4．カスタニェダの批判（1）の補強

［AT′1］をめぐるカスタニェダとヒンティカの議論の論点はほとんど以上で尽きている．この論争に関しては，私はカスタニェダの批判が妥当であると考える．しかし，ヒンティカが提示する，「強い」知識の規準の規定に曖昧さがあるため，それに対するカスタニェダの批判もまた決定的なものとはみなすことができないという難点が残る．というのも，なんらかの具体的条件を付加して，カスタニェダの事例は「強い」知識の規準を満足していないというヒンティカの側からの反論が可能であるように思われるからである．そのような反論の

余地を残さないために，ここでの議論の制約下で論理的に可能なもっとも「強い」知識の規準を導入してみたい．

クインタスは，クインタス＝戦争の英雄である現実の生身の個人について，クインタスが現在生きている時点までに生起したあらゆる事実を正確に知っていると想定しよう．クインタスは，クインタスが軍隊のテントで意識を喪失したことも，意識を回復する際に記憶喪失になったことも，戦闘において英雄となったことも，軍隊生活の挿話を完全に忘れ去ってしまったことも，その英雄のあらゆる記事を研究し，その英雄が100回負傷した唯一の人物であることを発見したこともすべて知っているのである．しかし，その（現実的には不可能な）「全知」の想定のもと[18]でさえ，クインタスは，クインタス＝戦争の英雄が，彼*であることを知らないということは論理的には可能なのである．クインタスは，その時点までのクインタスの全情報を，（移動式のカメラ映像によってクインタスの全行動を観察する第三者が毎日刊行する）『クインタス新聞』の叙述に基づいて正確に把握している．しかし，クインタスは，彼*がだれであり，これまで彼*がだれであったのか，彼*が何をしてどう過ごしてきたのかについてはそのほとんどについて誤った信念を抱いているのである．クインタスには，もちろん自己意識はあり，彼*が何をしているのかは，行為するそのときに正しく把握している．しかしそうであるならば，クインタスは，『クインタス新聞』の叙述を毎日読み，クインタスについての正確な事実を把握しているうちに，クインタスと彼*についての知識との完璧な符合によって，彼*がクインタス自身にほかならないことに気づくはずではないだろうか．しかし，クインタスは，彼*がなしつつあることについて，その瞬間には正しく把握しているのだが，それについては少し時間が経過するとなぜか間違った記憶が変造されるようになっているのである．一方で『クインタス新聞』を通じて獲得したクインタスについての知識は正確に保持されるのである．この想定下では，クインタスは，クインタスについて最大限の知識を獲得・蓄積して，クインタスという現実の生身の個人を現実世界に最も正確に位置づけることができるのであるが，そのことによって彼*がそのクインタスであることを知ることはけっしてできないのである．

以上の想定は経験的には起こりえないであろうが，そこに少なくとも論理的な不整合は含まれていないと思われる．そうであるならば，可能なかぎりもっとも「強い」知識の規準において（11）（[AT′1]）の前件を満足したとしても後件が帰結しないことがありうることになるのである．

2-5. カスタニェダの批判（2）

それでは次にもう一つの条件法

［AT′2］《a は，彼*$_{a1}$が……であることを知っている》→《(∃x)(x = a & Ka (…x…))》

に対するカスタニェダの批判を検討しよう．まず，カスタニェダは，端的に，後件について，「a」が指示している人物を指示する何らかの個体定項 h について，《h = a & Ka（…h…)》という存在例化を認めるならば，それは，［IT.1］(の一般的定式化）に背反することを指摘する．「a」を「雑誌『魂』の編集長」，それと同一人物を指示する個体定項「h」を「ガスコン」としよう．この存在例化を許容すると，

《雑誌『魂』の編集長は，彼*が富豪であることを知っている》は，《雑誌『魂』の編集長は，ガスコンが富豪であることを知っている》を含意する．

となり，明白に［IT.1］に抵触する．したがって，ヒンティカの認識論理の体系において，外延的な論理における量化計算が許容されるならば，そのことだけに基づいて［AT′2］を批判することが可能となる．しかし，カスタニェダは，認識論理の体系においてはこの存在例化を制限する適切な理由があることを認める．「純粋な量化においては，《(∃x)(x is f)》は，ある個体定項「h」に対して《h is f》を含意する（中略）ことの類同物が存在しなければならない．しかし認識論理の場合においては，私たちは《(∃x)》を例化する名前や記述を案出することはできない．例えば，私たちは《(∃x)(Ka(x is f))》を満足する対象に対する名前を案出し，《Ka(h is f)》とすることができない．というのもそのとき私たちは，a は名前「h」のもとでその対象を知っていることを主張することになるのだが，それは法外な要求だからである．すなわち，存在例化は認識論理において特別な取り扱いが必要とされるのである」[19)]．

認識論理における存在例化のこの制限についてカスタニェダはヒンティカに譲歩する．しかし，カスタニェダは，その譲歩を前提としたうえで，ヒンティカの体系において［AT′2］から矛盾を導出することによって［AT′2］の批判を試みる．その議論は次のように整理できる．

①［AT′2］はある意味において妥当である．

たとえば，

（12）戦争の英雄は，彼*が100回負傷したことを（時点 t において）知っている．

は，

（13）(∃x)(x = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（x は100回負傷した))

を含意する．（13）は解釈（B）によれば，「現実に英雄と同一であり，かつ英雄に知られていて，英雄が，その人が100回負傷したことを，時点 t において知っているというような人が存在する」と読むことができる．たしかに直観的には，この含意関係は明白に真であるように思われる．

②認識論理においては，存在量化言明（(13)）は個体定項への例化が認められない．

したがって，（13）の個体定項についての例化，例えば，《クインタス = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（クインタスは100回負傷した)》を導出することから帰結する［IT.1］との背反を根拠に，［AT′2］を批判することはできない．

③ヒンティカの体系においては次のような規則（C. ind=）が認められている．

例えば，「b」，「c」を個体定項とするとき

（14）(∃x)(b = x & Ka(b = x))

（15）(∃x)(c = x & Ka(c = x))

（16）b = c

があるモデル集合 μ に含まれている場合には，次の

（17）Ka(b = c)

もまたそれに含まれる．この（C. ind=）は，「前提（14），（15），（16）は（17）を含意する」という規則に読み替えることができる[20)]．カスタニェダは［AT′2］と（C. ind=）から矛盾が帰結すると主張する．そこでは矛盾の具体的な導出手順は述べられていないので，ここでそれを再構成してみよう．彼は，まず（12)（［AT′2］の前件）と次の

（18）(∃x)(x = 英雄 & ¬ $K^{t}_{英雄}$（x は100回負傷した))

が両立可能であることを指摘する．（18）は解釈（B）によれば，「現実に英雄と同一であり，かつ英雄に知られていて，英雄が，その人が100回負傷したことを，時点 t において知りそ

こねているというような人が存在する」と読むことができる．それは例えば，英雄の伝記作者である．英雄の伝記作者は，英雄とたまたま実際に同一であって，かつ英雄に知られている現実の人物なのだが，英雄は彼（英雄の伝記作者）が100回負傷したことを知らないのである．

カスタニェダにしたがい（12）と（18）が両立可能であるとしよう．するとまず（英雄と100回の負傷者は同義なので）（12）は次を含意する．

（14）′(∃x)(英雄 = x & $K_{英雄}$（英雄 = x))

さらに（18）より伝記作者は英雄と同一でかつ英雄に知られている現実の人物であるから

（15）′(∃x)(伝記作者 = x & $K_{英雄}$（伝記作者 = x))

そして，事実として，

（16）′英雄 = 伝記作者

したがって，(C. ind=）により，

（17）′$K_{英雄}$（英雄 = 伝記作者）

が帰結する．しかし，(17）′は，カスタニェダが先に指摘した（18）と矛盾する．たしかに，英雄は，伝記作者が100回負傷したことすなわち英雄であることを知らないからである．これによって仮に［AT′2］の後件の存在例化についてヒンティカに譲歩するとしても，ヒンティカの体系内において［AT′2］から矛盾を導出することができるわけである．それが，カスタニェダが［AT′2］を批判する論拠である．

2-6. カスタニェダの批判（2）の検討

カスタニェダによる［AT′2］のこの批判は有効なのだろうか．私見では，この批判は，ヒンティカの体系，直接には規則（C. ind=）に対する批判としては有効だとしても，［AT′2］に対する批判としては有効ではありえない．なぜなら，上述の推論による矛盾の導出が認められるとしたら，それは自己意識とは無関係な言明についてもまったく同様に妥当するからである．例えば，「a」=「英雄」，「b」=「ヘスペラス」，「c」=「フォスフォラス」，と

すると，

（14）″（∃x）（ヘスペラス = x & $K_{英雄}$（ヘスペラス = x））
（15）″（∃x）（フォスフォラス = x & $K_{英雄}$（フォスフォラス = x））
（16）″ ヘスペラス = フォスフォラス

を前提すると，規則（C. ind=）より

（17）″ $K_{英雄}$（ヘスペラス = フォスフォラス）

が帰結する．しかしこれは私たちの直観と背反している．というのも，前提を満足していても，（17）″を満足しないことはごくありきたりの事実だからである．つまりカスタニェダの［AT′2］批判の矛先は，規則（C. ind=）が例示するとおり，ヒンティカの認識体系においては，極めて非人間的な知識あるいは信念の概念が形式化されていることに向けられているのである[21)]．したがって逆に言えば，規則（C. ind=）を満足するような認識能力を前提しさえすればヘスペラスの事例はもとより，英雄の事例においても矛盾は生じえないのである．

規則（C. ind=）を満足するのは，同一の対象を指示するあらゆる個体定項（固有名，確定記述）を，その同一の対象を指示するものとして知ることができるという認識能力である．その（C. ind=）が満足されているとすれば，個体定項「戦争の英雄」によって指示される対象（＝クインタス）を知っている人は同一の対象を指示する個体定項「英雄の伝記作者」も，その同一の対象を指示するものとして知っているし，その逆もまた成り立つ．したがって（17）′は問題なく成立することになる．重要なのは，（C. ind=）を満足する認識能力は経験的には成立しえないとしても，その想定自体に不整合はないということである．したがって，（C. ind=）に対するカスタニェダの批判は，少なくとも［AT′2］批判としては妥当ではないと結論せざるをえない．

2-7. カスタニェダの批判（2）の修正

それでは，［AT′2］に対する批判は不可能なのだろうか．もしそうだとすれば，少なくとも，［AT′2］の意味における「彼*」の還元可能性が認められることになる．しかし，私見によれば，［AT′2］に対する批判は十分可能である．少なくとも上記で検討した［AT′2］に対する批判に関しては，カスタニェダがヒンティカに対して譲歩しすぎている点がある．それは彼が，①において，［AT′2］における含意のある意味における妥当性を容認している

点にある．しかし私見では，［AT′2］における含意はいかなる意味においても妥当ではない．その点を確認しよう．カスタニェダは［AT′2］の一例として，

戦争の英雄は彼*が100回負傷したことを（時点 t において）知っている．
→（∃x）（x = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（ x は100回負傷した））

という含意関係の妥当性を容認していた．この条件法の意味を精確に把握するためには後件に含まれる自由変項 x とその対象領域を明確に規定しておく必要がある．カスタニェダ自身は，自由変項 x の対象領域をたんに「人物 persons」と規定している[22]．しかしここでは x の対象領域は，（特定の可能世界において）任意の人物を一意的に指示する表現 x と規定したほうが議論が精確になる．たとえば，人物クインタスを一意的に指示する，クインタス，戦争の英雄，100回の負傷者，英雄の伝記作者などが，その領域に含まれる．そしてその指示対象が同一なので，クインタス = 戦争の英雄 = 100回の負傷者 = 英雄の伝記作者，という等号が成立することになる．そのとき，［IT.1］により，対象領域に含まれるどの個体定項 a（クインタス，戦争の英雄，100回の負傷者，英雄の伝記作者，…）についても，

戦争の英雄は彼*が100回負傷したことを（時点 t において）知っている．
→ a = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（ a は100回負傷した）

は成立しない．しかし，［AT′2］の容認は，（少なくとも対象領域の要素が有限であるならば）個体定項による例化の選言の含意を意味している．

戦争の英雄は彼*が100回負傷したこと（= w）を（時点 t において）知っている．
→（a = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（w = a））∨（ b = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（w = b））∨（c = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$（w = c））∨…

しかし，戦争の英雄が，彼*が100回負傷したことを知っている場合においても，英雄を一意的に指示するいかなる表現も知らないということは想定可能であろう．例えば，一時的な記憶障害で英雄は，彼（彼*ではなく英雄）を一意的に指示する表現のすべてを忘れてしまったり，誤った固有名や記述を彼（彼*ではなく英雄）を指示する表現だと信じているかもしれない[23]．そして，私たちの認識が有限であることを自明の前提とするなら，存在量化言明を有限の選言肢に還元して考察することに問題はないだろう．また仮に対象領域に無限の要素が含まれるとしても，その事実のみによってここでの批判をどのように回避できるのかはまったく不明だと言わざるをえない[24]．

したがってカスタニェダの譲歩にもかかわらず，［AT′2］はいかなる意味においても妥当ではない．その妥当性に固執するためには，自由変項の対象領域を先述の内容とはまったく異質の不可思議な領域に設定するほかないと思われる．

§Ⅲ　事象知識のもう一つの水準

3-1. 直知に基づく自己についての事象知識

前節までの議論で，［AT］の批判，したがって「彼*」の事象知識への還元不可能性の論証は完了したのだろうか．だが，ヒンティカとカスタニェダによる「彼*」の還元可能性をめぐる議論の範疇外に，検討を要するひとつの典型的な事象知識が残されている．それは，「直知に基づく事象知識」[25]とでも呼ぶべきものである．カスタニェダがそれを直接論じなかった理由は後論で明らかにする．

直知に基づく自己についての事象知識（以下「［RKa］」と略記．それに対して前節で検討した「個体定項に基づく自己についての事象知識」は「［RKc］」と略記）の例としては，ペリーの次のような事例がある[26]．ガスコンは，あるスーパーマーケットの床に砂糖がこぼれているのを発見する．じつはそれは，ガスコンがショッピングカートに取り置いた砂糖袋の破れ目からこぼれているものなのだが，彼はそれに気づいていない．通路の反対側に鏡があり，ガスコンは，その鏡に映っているのが砂糖を散乱させている店員で，その店員がだんだん鏡のほうに近づいてきていると信じている．そして，ガスコンはそれを指して「彼が砂糖を撒き散らしているんだ」とつぶやく．彼は，鏡に映るその姿が自分自身であることにまだ気づいていない．

このとき，《ガスコンは（彼*ではなく）ガスコンについて，彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知っている》と言える．またそのときガスコンが，店内に砂糖を撒き散らす鏡に映った人物を指示するいかなる個体定項も知らないということは想定可能である．例えば，ガスコンは「店内に砂糖を撒き散らす店員」「鏡に向かって近づいてくる店員」という誤った個体定項だけを信じているかもしれない．しかし，適切な個体定項を知らないとしても，ガスコンは店内に砂糖を散布する人物を，鏡の反映を通じて直接見知っていると言える．そして，この直接の見知りを個体定項で表現することは不可能であるが，「彼*」を含む記述によって表現できる．たとえば「彼*が鏡の反映を通じて見ている人」というように[27]．D. ルイスは，［RKa］のその特徴を明確に指摘している．「見ることは直知の関係である．私は，自分自身を見ているとは気づかずに，グラスに映った自分自身を見ている．私は，『私が見ている人物』という記述のもとで，火がついたズボンをはいているという性質を私自身に帰属する．したがって私は，私が見ている事象，すなわち私自身について，彼のズボンに火が

ついていると信じている」[28]．

以上の考察をふまえて，［RKa］が成立する条件を規定しておこう．

［［RKa］成立の条件］

①認識主体 a について《a は a について，彼が…であることを知っている》(《ガスコンは（彼*ではなく）ガスコンについて，彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知っている》)．

②認識主体 a は a を一意的に指示する個体定項をなにも知らない．

③認識主体 a は，直接の見知りによって a を知っている．したがって「彼*」を含む記述によって a を指示できる（《ガスコンは，彼*が店の鏡にその姿の反映を見ている人物（＝ガスコン）について，彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知っている》)．

この規定によって，カスタニェダが，「彼*」の還元可能性を論じる際に，［RKa］を直接論じなかった理由が明白になるだろう．というのも条件③により，たとえ彼*についての知識（以下「〈自己－彼*〉知識」と略記）を［RKa］に還元できたとしても，その分析によって「彼*」を消去することは不可能だからである．

ところで，ペリーやルイスの事例が明らかに示しているように，［RKa］は〈自己－彼*〉知識が成立するための十分条件ではありえない．ガスコンは，彼*が店内に砂糖を撒き散らしていることを知ることなしに，一方で［RKa］の条件を満足し，ガスコンについて直知に基づいて彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知ることができる．あるいはガスコンは，彼*が火傷しようとしていることを知ることなしに，［RKa］の条件を満足して，ガスコンについて直知に基づいて彼が火傷しようとしていることを知ることができるからである．

本論ではそれに加えて，［RKa］の成立は，〈自己－彼*〉知識成立のための必要条件でさえないことを示したいと思う．〈自己－彼*〉知識の成立は［RKa］の成立を含意しないのである．もしそうであれば〈自己－彼*〉知識は［RKa］つまり直知に基づく自己に関する事象知識にいかなる意味でも還元不可能だと言える．そのことを，〈自己－彼*〉知識とは異なり，［RKa］が「個体定項に基づく自己についての事象知識」［RKc］に還元可能であることを示すことによって論証したいと思う．

3-2．［RKa］の還元可能性

アンスコムは［RKa］を考察するための手がかりとなるたいへん興味深い言語ゲームを案出している．それはこういう言語ゲームである[29]．その言語ゲーム社会では，すべての人に二つの名前が付けられている．一つは彼らの背中と胸のてっぺんに刻まれていて，その担い手自身はその名前を見ることができない．それらは，「B」，「C」，…，「Z」，と各人ごとに異

なっている．もう一つは「A」でそれは各人の手首の内側に刻まれていてすべての人にとって同じである．人々の行為について報告する際，もし見ることができるならば，みな彼らの背中あるいは胸の上の名前を使用する．またすべての人は，私たちが固有名の発音に対して反応するような仕方で，自分自身の胸や背中の名前の発音に反応することを学習する．自分自身の行為についての報告に際しては，各人が端的に観察から与えることができるものとしては，手首に刻まれた名前が使われる．しかしその報告は観察に基づくだけではなく，推論や証拠などに基づいてもおこなわれる．例えば，「B」を主語としてもつ他の人の言明から，B は主語として「A」をもつ文によって表現される結論を導出できるのである．

この「A」は，指標詞「私」と重要な特質を共有するようにアンスコムによって考え出された．「A」も「私」も，①各人はみなそれを使用することが認められる，しかし，②それを使用する当人，例えば B 以外の誰も，B その人を指示するためにそれを使用することはできない，という特質をもっているのである．

ここで本節での考察に役立てるためにこの事例に改変を施したいと思う．アンスコムの例では，この人々は自己意識を欠いた存在として想定されている[30)]．しかし，ここでは彼らに自己意識の存在を認めることにする．つまり，彼らに，指標詞「私」(あるいは「彼*」)を私たちと同じような仕方で使用できる能力を賦与するのである．しかし，それには一つ重要な限定が付される．彼らは指標詞「私」を使用できるのであるが，自分自身が，B, C,..., X の誰であるのかを知らないという条件下に置かれているのである．その主たる理由は，彼らは自分の身体的運動に随伴する自由の意識を剥奪されていることである．彼らには，自分が，B, C, ..., X の誰の手足を，誰の口を自由に動かしているのかがわからない，あるいはそれを判断するために必要な感覚が欠如しているのである．他者の視点から見たとき，B は B の口を自由に使って話し，B の手足を使用して行動しているように見えるのだが，B には，自分が B の口や手足を動かしているのではなく，その口や手足は他人のそれと同様，自分の意のままには動かず，動くときには B の意志とは独立に勝手に動いているようにしか感じられないのである．

このような条件下でも彼らは［RKa］をもつことができる．例えば，G は，その手首に記号 A を刻まれた人物―― G には見えないその背中あるいは胸の上に記号 G が刻まれた人物と同一の人物――について彼を一意的に指示するいかなる個体定項も知ることなく観察に基づいて多様な知識を得ることができる．例えば G は，その人物がスーパーマーケットの店内で砂糖を撒き散らしていることを知るかもしれない．そのときたしかに［RKa］の3条件は満足されている．

①認識主体 G について《G は G について，彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知ってい

る》.

②認識主体 G は G を一意的に指示する個体定項をなにも知らない.

③認識主体 G は，直接の見知りによって G を知っており，したがって「彼*」を含む記述によって G を指示できる（《G は，彼*がその手首に記号 A が刻まれていることを認知する人物（= G）について，彼が店内に砂糖を撒き散らしていることを知っている》）.

ここでの想定の前提により，このとき G は彼*が G であることを知らない．G がその手首に記号 A を認知する人物の身体は，B や C や D の身体と同じく G が自由に動かすことができない身体でしかないからである．G には G の身体の運動を他者のそれとまったく同列に観察することしかできないのである（なぜか，G だけに対しては手首に刻まれた記号 A しか観察できないという位置関係にしか立つことができない，ということを除いて）.

この事例を用いて［RKa］が「個体定項に基づく自己についての事象知識」（［RKc］）に還元可能であることを示そう．G は，彼*が記号 A に依拠して指示する人物（= G）について他者と情報交換するうちに，やがて，彼*には見ることのできないその人物の胸と背中には「G」という名前が刻まれていることを知るだろう．そのとき G は，「彼*がその手首に記号 A が刻まれていることを認知する人物」という記述が「その背中と胸に記号 G が刻まれている人物」という記述 g と交換可能であることを知るのである．それによって彼の知識内容は，［RKa］から［RKc］へと移行する．なぜなら G を指示する適切な個体定項を知ることによって［RKa］の条件②を満足できなくなるからである．そこで得た［RKc］はヒンティカの表記法では次のように表現できる.

$$g = G \;\&\; K_G\,(g = G) \rightarrow (\exists x)\,(x = G \;\&\; K_G\,(x = G))$$

記述 g は一意的に個体を指示する表現なので自由変項 x の対象領域に含まれる（一方，「彼*がその手首に記号 A が刻まれていることを認知する人物」という表現には「彼*」が含まれており，それ単独では一意的に個体を指示することは不可能なのでそもそもその対象領域には含まれえない）．［RKa］から［RKc］への移行は，次の条件の成立によって可能となった.

（19）G は，彼*が記号 A に依拠して指示する人物 = 背中と胸に記号 G が刻まれている人物，であることを知っている.

しかし，この事実だけに基づいて［RKa］の［RKc］への還元を主張することはできない.

［RKa］がいかなる意味において［RKc］に還元可能であるのかがまったく明らかになっていないからである．さて，ここでGが（19）の知識を喪失する状況を想定しよう．例えば，時点t_1以降，Gの手首に刻まれた記号が一部分抹消され，もはや「A」とは同定できない形態に変質してしまったとする．一方，背中と胸の記号Gは無傷である．そのときGは「彼*が記号Aに依拠して指示する人物」という記述によって誰も指示することはできないので，（19）の等号はもはや成立しない．しかし，その場合でもGは，個体定項gを用いて問題なくGについて記述しGについての知識を獲得し，生身の個人Gを現実世界に正確に位置づけることができるのである．Gがたとえ［RKa］を可能にする記述（③）を喪失したとしても，Gを現実世界に正確に位置づけるために必要な手段を実質的には何も失うことはないのである．つまり（19）の認識が成立する以前の［RKa］だけが可能な状況と（19）の認識を喪失して，完全に［RKc］だけが可能になった場合についてGの認識状態には本質的な相異，断絶は存在しないのである．そのことに，［RKa］の［RKc］への還元可能性が示されていると言える．

3-3.〈自己－彼*〉知識の［RKc］への還元不可能性

この事実は〈自己－彼*〉知識の場合と対比すると明瞭になるだろう．Gが，Gを一意的に指示する個体定項を知ることなしに，誰かが店内に砂糖を撒き散らしていることを，彼*が見ているのを知っているとしよう．そして，あるとき，Gは彼*が誰であるのかつまりGであることを知ることができるようになったとする．Gは，突然，誰の身体を自由に動かしているのかがわかるようになるのである．このとき，

（20）Gは，彼* ＝背中と胸に記号Gが刻まれている人物，であることを知っている．

が成立する．（20）が成立している限り，GがGについて知っている内容とGが彼*について知っている内容とは等値である．

（21）Gはϕ（彼*）を知っている．⇔ Gはϕ（G）を知っている．

例えば，

（22）Gは彼*が誰かが砂糖を撒き散らしているのを見ているのを知っている．
⇔ GはGが誰かが砂糖を撒き散らしているのを見ているのを知っている．

このとき，（20）の同一性の認識によって，〈自己－彼*〉知識から［RKc］への移行が可能になっていると言える．ここで（［RKa］の場合と類比的に）Gが（20）の認識を喪失したとしよう．そのときGは，再び自分が誰であるのかわからない状態に陥ってしまうのである．その場合でも，個体定項g（「背中と胸に記号Gが刻まれている人物」）は正しくGを指示しており，Gはgを用いてGを現実世界に正確に位置づけることができる（《GはGが誰かが砂糖を撒き散らしているのを見ているのを知っている》）．しかし，そのときGは，自分自身（彼*）の現実世界への位置づけという重要な認識を失ってしまうのである．

（20）の認識が成立している場合と喪失した場合とで［RKc］は本質的な変化を被る．それは，Gによる彼*の現実世界への位置づけとGによる生身の個人Gの現実世界への位置づけとの関連づけとその喪失という変容である．「彼*がその手首に記号Aが刻まれていることを認知する人物」という記述と記述gとは置換可能であったが，それと同じ意味において「彼* 」と記述gとは置換可能ではない．したがって，［RKa］とは異なり，〈自己－彼*〉知識は本質的に，［RKc］に還元することが不可能な知識なのである．

3-4.〈自己－彼*〉知識の［RKa］への還元不可能性

以上の考察をふまえて，［RKa］が〈自己－彼*〉知識成立の必要条件でさえありえないことを確認しよう．〈自己－彼*〉知識，例えばGは彼*が雑誌『魂』の編集長であることを知っているとする．その場合でも，［RKa］の次の条件

③認識主体aは，直接の見知りによってaを知っている．したがって「彼*」を含む記述によってaを指示できる．

は成立しない．なぜなら「彼*」によってaを指示することはできないからである．もしそれが可能であるなら，「彼*」はaを指示する個体定項，例えば記述gと置換可能であるはずだが，そうではありえないことは先に確認したとおりである（他方で，［RKa］に現れる「彼*」を含む記述，例えば「彼*が記号Aに依拠して指示する人物」は個体定項と置換可能であった．したがってそれはその意味においてaに対する指示表現とみなすことができるのである）．そして，〈自己－彼*〉知識が条件③を満足しないことから，さらに条件

①認識主体aについて《aはaについて，彼が...であることを知っている》．

をも満足していないことが帰結する．〈自己－彼*〉知識に現れる「彼*」は認識主体aを指示できないからである．

結論

本論では，指標詞「私」(「彼*」) あるいは〈自己－彼*〉知識の還元不可能性を次のステップをふんで論証してきた．1,〈自己－彼*〉知識は言表知識に還元不可能である．それをカスタニェダの議論に依拠しながら確認した（§Ⅰ）．2,〈自己－彼*〉知識は，(明示的には表現されない) 個体定項に基づく自己についての事象知識［RKc］に還元不可能である（§Ⅱ）．ヒンティカとカスタニェダの論争のやや詳細な検討を通じてそれを論証することを試みた．その際，［RKc］は〈自己－彼*〉知識成立の十分条件でも必要条件でもありえないことをカスタニェダによるヒンティカ批判を補足・修正しながら論証した．3,〈自己－彼*〉知識は直知に基づく自己についての事象知識［RKa］に還元不可能である（§Ⅲ）．［RKa］はその知識の表現に「彼*」を含まざるをえないため，〈自己－彼*〉知識の還元不可能性をめぐるカスタニェダの直接の考察対象とはならなかったと思われる．しかし，［RKa］は［RKc］と置換可能であるという意味においては，後者に還元可能なのである．一方，〈自己－彼*〉知識にはそのような置換可能性は成立しない．したがって〈自己－彼*〉知識は［RKa］と本質的に区別されるのである．つまり〈自己－彼*〉知識は，［RKa］にも還元不可能なのである．

これまでの議論が妥当であるとしたら，そこから次のテーゼが帰結する．

［テーゼⅠ］〈自己－彼*〉知識における指標詞「私」(「彼*」) はいかなる意味においても指示表現ではありえない．

ヒンティカにその典型を見る指標詞「私」(「彼*」) の還元可能性の主張は，すべて指標詞「私」(「彼*」) を指示表現とみなす解釈の妥当性を正当化するために，それに指示対象を確保することを目的としていると言えるだろう．言表知識への還元とは，指標詞「私」を，言表の構成要素である固有名，確定記述，指示詞，指標詞という指示表現へと還元・分析する試みである．また事象知識への還元とは，［RKc］であれ［RKa］であれ，〈自己－彼*〉知識を事象，すなわち現実に存在する生身の個人についての認識とみなす試みである．それは，指標詞「私」(「彼*」) を，(言表知識よりは迂遠な仕方で) その事象（現実に存在する個人）についての指示表現に同化することを目的としている[31)]．本論ではそれらをすべて批判したのだから（指標詞「私」を指示表現とするそれ以外の代替の理論が提示されない限り）［テーゼⅠ］に論拠が与えられることになるのである．

［テーゼⅠ］をまったく別の側面から擁護する論拠がある．私たちの日常的な言語ゲームでは，言語使用に習熟しそれを習得したとみなされた人たちについて，一人称言明にある特

権性が認められている．例えば，

（23）ガスコンは，彼*は，雑誌『魂』の編集長が富豪であると信じている，と主張する．
Gaskon asserts that he * believes that the editor of *Soul* is a millionaire.

という例を考えてみよう．この種類の言明について，ガスコンは，その信念内容，雑誌『魂』の編集長が富豪である，について誤る可能性は認められるが，彼*がそう信じたことそのことについては不可謬性が付与される[32]．しかし，どのような仕方であれ「彼*」を指示表現とみなすとしたらその理論においてこの不可謬性が成立する余地はない．「彼*」を指示表現とみなすとき，それは，その対象を指示する表現あるいはその指示対象に置換できる．それが可能であるならば，「彼*」を主語とする節は，それだけで独立した命題を構成できる．なぜなら，そのときフレーゲの意味における「不完全な要素」は存在しないからである[33]．例えば，

（24）ガスコンは，雑誌『魂』の編集長が富豪であることを信じている．

が，その置換の帰結であるとしよう．しかし，（24）は誰にとっても，もちろんガスコン自身にとっても不可謬な命題とはなりえない．なにより，主語の位置にあるガスコンという人物の同定について誤る可能性がつねにあるからである．ガスコンも自分自身がガスコンではなく，他の人がガスコンであると誤って信じてしまうことは十分可能である．では一人称言明に特有の不可謬性はどのようにしたら表現可能になるのか．（23）もまたそれ全体としては可謬的でしかありえない．しかし（23）を用いて，《ガスコンが，彼*が，雑誌『魂』の編集長が富豪であると信じている，と主張するとき，彼*がそう信じたことだけは不可謬なのだ》という仕方であればその不可謬性を表現できる．なぜなら，そのとき「彼*」はいかなる指示表現にも置換不可能であるというその本質を保っているからである．「彼*」が指示表現ではないというテーゼは（23）のガスコンの主張内容がそれだけでは独立した命題を構成できないという事実に根拠を与えることによって，この不可謬性が成立することを可能にしているのである．その観点からすると，指標詞「私」（「彼*」）が指示表現ではありえないというテーゼとその根拠となる還元不可能性のテーゼは，私たちの常識に反するどころか，むしろ私たちの常識にその根拠を提供してくれるのである．

参考文献

［1］ Anscombe, G. E. M., 1975, "The First Person," *Mind and Language*, Oxford University Press, 45-65.

［2］ Boër, Steven E., and William G. Lycan, 1980, "Who, Me?" *The Philosophical Review* 89, 427-466.

［3］ Castañeda, Hector-Neri, 1964, Review of J. Hintikka, *Knowledge and Belief*, in *Journal of Symbolic Logic* 3, 132-134.

［4］ _____, 1966, " 'He' : A Study in the Logic of Self-Consciousness," *Ratio* 8, 130-157.

［5］ _____, 1967a, "Indicator and Quasi-Indicators," *American Philosophical Quarterly* 4, 85-100.

［6］ _____, 1967b, "On the Logic of Self-Knowledge," *Noûs* 1, 9-21.

［7］ _____, 1968a, "On the Logic of Attributions of Self-Knowledge to Others," *Journal of Philosophy* 65, 439-456.

［8］ _____, 1968b, "On the Phenomeno-Logic of the I," *Proceedings of the XIVth International Congress of Philosophy* 65, 439-456.

［9］ Geach, Peter T., 1957, "On Beliefs about Oneself," *Analysis* XVIII 1, 23-24.

［10］ Hintikka, Jaakko, 1962, *Knowledge and Belief: An Introduction to the Logic of the Two Notions*, Cornell University Press.

［11］ _____, 1967, "Individuals, Possible Worlds, and Epistemic Logic," *Noûs* 1, 33-62.

［12］ Irifuji, Motoyoshi, 1993, "From *De Se* to *De Me*,"『武蔵大学人文学会誌』, 第24巻, 第2号, 1-22.

［13］ Kaplan, David, 1989, "Demonstratives An Essay on the Semantics, Logic, Metaphysics, and Epistemology of Demonstratives and Other Indexicals," *Themes From Kaplan*, Almog, Joseph, et al., eds, 481-566.

［14］ Lewis, David, 1979, "Attitudes *De Dicto* and *De Se*," *The Philosophical Review* 88, 513-543.

［15］ Perry, John, 1977, "Frege on Demonstratives," *The Philosophical Review* 86, 474-497.

［16］ _____, 1979, "The Problem of Essential Indexical," *Noûs* 13, 3-21.

［17］ Wittgenstein, Ludwig, 1989, *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik,* in *Ludwig Wittgenstein Werkausgabe* Band 6, Suhrkamp.

［18］ 安井, 邦夫, 1999,「指示詞「私」の存在論――H. N. カスタニェダとフィヒテ」,『人間存在論』, 第5号, 73-91.

註

1）このテーゼを最も明確に主張するのは G. E. M. アンスコムである．「『私』は，指示することをその論理的な機能とする名前ではないし別の種類の表現でもない」([1], p.60)．本論とアンスコムの議論との関連について本論では主題的には検討しないが，少なくとも二つの相違を指摘できる．一つは，テーゼを導く過程の相違（カスタニェダによる指標詞「私」の分析を経由するかいなか），もう一つは，そのテーゼとデカルトのコギトとの関係である．アンスコムはそれを批判するが，本論はむしろそれを擁護する．その論点について本論の最後で簡単に触れる．

2）カスタニェダの還元不可能性テーゼの考察は，[4] で最も詳細に展開されているが，本節のまとめは，より簡潔な [7] pp.439-444 の叙述に主に依拠している．また，カスタニェダに従って，文 sentence についての括弧〈〉は文の名前を，文についての《》は，文が形成する言明 statement の名前を与えるために用いる．また本文中で使用する数字を囲む（）は，本文中ではじめに登場したその数字に引き続く文あるいは言明を文脈に応じて指示する．

3）本論で展開する議論は動詞「知っている」に限らず，「信じる」「推測する」「語る」「議論する」などといった命題的態度一般に多少の修正を施せば適用可能である．しかし，§Ⅱで検討するカスタニェダとヒンティカとの議論がもっぱら「知っている」の事例でなされるということを主たる理由として，本論ではこの動詞に限定して議論を進めることにする．

4）カスタニェダの指標詞「私」についてのこの分析手法の案出には，ウィトゲンシュタインの次の評言がそのまま妥当するように思われる．「表記法の改変によって見渡せない証明図を見渡せるようにするなら，そのときそれ以前には存在しなかった証明がはじめて作り出されたのだと，私は言いたい」([17], Teil III, § 2)．つまり，カスタニェダは，指標詞「私」を直接使用することなしに指標詞「私」の論理を分析する手法を案出したというその点だけにおいて，もうすでに一つの証明をしたと言えるのではないだろうか．本論はその表記法の効用を間接的に示す試みでもある．

5）例えば，§Ⅱで検討する事象知識に用いられる「彼，he」は（ii）（iii）（iv）の特徴を共有している．

6）カスタニェダは，‘indicator’ という語を，「指示詞 demonstratives」「指標詞 indexicals」の総称として使用している（cf., [5]）．しかし，本論では，指標詞「私」だけを考察対象とするので，‘quasi-indicator’ に「準－指標詞」という訳語を適用している．

7）このテーゼにおいてカスタニェダの念頭にある量化子を用いた分析の可能性については，それほど重要ではないので本論では省略するが，[4], pp.132-134 において（C）としてごく簡単に検討されている．また事象知識と関連づけられた量化子による分析の可能性については，次節で詳細に検討する．

8）カスタニェダは，確定記述，固有名，および準－指標詞と明確に区別される指示詞，指標詞を，個体定項（individual constants）と総称している．本論では，その意味において「個体定項」という語を使用することにする．

9) 事象知識のこの表現法については，例えば，[16], pp.9-12, を参照のこと．またカスタニェダが，[4], pp.135-137で検討している（F）は（その用語こそ用いていないが）事象知識による「彼*」の還元可能性の検討に対応している．

10) 本節は，主にカスタニェダ［3],[6],[7], ヒンティカ［10],[11］に基づく二人の分析と討議に基づいている．また用語は，カスタニェダが自らの議論に適合させるようにヒンティカの表記を改訂したものに基づいている．

11) ［AT］に含まれる「彼*$_{a1}$」とは，表現「a」を直接の先行詞としてもつ1度（degree 1）の「彼*」のことである．「彼*」の度数とは，1文に，二つ以上の命題的態度「〜を知っている（know that)」が登場する場合，いずれの主語をその先行詞とするかを明示するためにカスタニェダが導入した概念である．ただし本論で対象にするのは，1度のケースに限られるので度数を指示する数字は無視しても議論に影響はない．

12) Cf., [7], p.446.

13) この例では，K の作用域は，認識主体（英雄）を一方の項にもつ同一性言明になっている．これは［AT′1］の前件をかなり強くしている，つまり認識内容をかなり豊富なものにしている．したがって［AT′1］を擁護する立場にとっては有利な条件を，それを批判する立場にとっては逆に不利な条件を設定していると言える．ここでは，［AT′1］の批判を企図しているのでこの変更は本論の議論の有効性をなんら損なうことはない．

14) [7], p.446.

15) [11], p.53.

16) *Ibid*., p.52

17) [7], p.454.

18) これは，自分自身がそのどちらであるのか以外については全知である二人の神，というルイスによる想定（[14], pp.520-521）の一つの変形であると言える．

19) [7], p.452.

20) カスタニェダは [7], p.450-451 で，ヒンティカの認識論理の別の規則についてこれと同型の読み替えをおこなっている．

21)「こうしてヒンティカは，おそらくそれに対していかなる人間的な事例も存在しない，極めて強い意味での「知っている」「信じている」を形式化した」([3], p.133)．

22) Cf., [7], p.449.

23) ペリーは，カスタニェダに言及しつつ，本質的にこれと同じ論点を，「信念の不必要性 the non-necessity of belief」「信念の無関係性　the irrelevancy of belief」という名のもとで主張している（[15], pp.486-487）. ここでの記憶喪失の場合が前者に対応し，誤った信念の場合が後者に対応している．

24) ただし，この例では，知識内容を同一性言明にしているので，その一つの項「100回負傷したこと＝w」が英雄を一意的に指示する表現となっている．したがって少なくともwによる例化 w = 英雄 & $K^{t}_{英雄}$(w = w) だけは，含意するとは言えるだろう．しかし，それを認めたとしても，知識内容に一意的な指示表現を含まない場合（《戦争の英雄は彼*が富豪であることを知っている》）にはそれと同じ主張は成り立たない．またこの含意関係は，英雄が，（彼*ではなく）英雄を一意的に指示するものとしてたまたま知っている個体定項に限って，しかもその自己同一性の主張に妥当するだけであり，そのような認識への還元を認めたとしてもそれはほとんどなんの意義ももたないように思われる．

25) ルイスは事象知識（彼は知識でなく信念の例で論じているが）を7つに類型化し，それらについて「直知の関係 a relation of acquaintance」を共有していると述べる（[14], p. 541-542）．しかし，本論での「直知に基づく事象知識」は，ルイスのそれより外延が狭く彼の類型の一部（事例（1），（5））しかそれに含まれないと思われる．

26) Cf., [16], p.12. ここでは，本論の叙述にあわせて多少の変更を加えた．

27) このときガスコンは，ガスコンについていくつかの正しい個体定項，例えば「雑誌『魂』の編集長」を知っていると仮定しよう．そのときでも，ガスコンは彼*が鏡の反映を通じて見ている人と雑誌『魂』の編集長が同一人物であるとは信じていない．したがって，それによって真なる個体定項「雑誌『魂』の編集長」は，「雑誌『魂』の編集長であって，彼*が鏡の反映を通じて見ている人とは同一ではない人物」という偽なるそれへと変質してしまうのである．この議論はガスコンがガスコンについて把握しているすべての真なる個体定項について妥当する．これは適切な個体定項を知らないという条件を満足するケースの蓋然性を高めるだろう．

28) [14], p.543.

29) Cf., [1], p.49.

30)「これらのかなり非人間的な人々の代わりに，スキャン装置を備えた機械が，私の想定上の人々と同じような仕方で記号を刻まれ，そのスキャナーの画面上に現れたものをあるアウトプットへと翻訳するようにプログラムされていると想定する」([1], p.49-50）．

31) 詳細に論じる余裕がなかったがこれまでに得られた観点から，ペリーの指標詞の理論について簡単に触れておきたい．ペリーのようにカスタニェダの還元不可能性テーゼに同調していたとしても，巧妙な仕方で指標詞「私」に指示対象を確保することになる理論は，そのテーゼに背反していると言わざるをえないだろう．ペリー（あるいはカプラン）のように，指標詞「私」を意味特性と内容によって分析する理論は，「私」を［RKa］へ，したがって［RKc］へと還元する試みにほかならないと思われる．別の言い方をすれば，それは，「私」を，本論でアンスコムに依拠して提示した一種の固有名「A」に同化する企てにほかならない．ルイスのペリーに対する次の批判はその観点からなされていると思われる．「自己についての信念 belief ***de se*** は事象信念 belief ***de re*** の一種とし

て分類されるのである」「自己帰属 self-ascription は，事象についての，自分自身に対する，帰属と全く同じというわけではない」([14], p.543)．ここでのルイスの「自己についての信念」とは本論の［RKa］［RKc］に，そして「自己帰属」は〈自己－彼*〉知識に対応している．つまり「自己についての知識」（［RKa］［RKc］）は事象知識の一種でありそれに還元可能であるが，「自己帰属」（〈自己－彼*〉知識）はそうではない，ということである．

32) この場合でももちろん，使用している語の意味に関する誤りの可能性から免れることはできない．その点を留保するならば，ここで認められている不可謬性とは，本質的に，デカルトによるコギトの不可疑性と同じだと言える．

33) カスタニェダは [4] で，「彼*」がここで述べる意味において「本質的に不完全である」ことをテーゼ（H*1）で明瞭に主張している．「代名詞「彼*」は厳密に従属的な代名詞である：それはそれ自体として不完全あるいは，他の表現との連関においてのみ意味をもつ syncategorematic 記号で，「彼*」のトークン w を含む間接話法ではないあらゆる文あるいは節もまた不完全あるいは他の表現との連関においてのみ意味をもつ文あるいは節である」([4], p.151)．

The Irreducibility of the Indexical 'I'

Ken SHIGETA

Abstract

H. N. Castañeda is one philosopher who examines the logic of the indexical 'I'. He does so closely and precisely in an attempt to make it as clear and as distinct as possible. One important thesis which Castañeda presents us with concerning the indexical 'I' can be called the 'irreducible thesis of the indexical 'I'' ([IT]). To put it briefly, it says that it is impossible to reduce 'I' to other expressions which do not include it. I aim at presenting an argument which can defend [IT] .

I will develop this thesis in the following way. At first, based on Castañeda's argument I confirm briefly that knowledge which contains the indexical 'I' cannot be reduced to knowledge *de dicto* (§ I). Next, I will introduce J. Hintikka's epistemic logic which attempts to reduce knowledge which contains 'I' to knowledge *de re* and then examine Castañeda's criticism of Hintikka's argument (§ II). In this section I will complement and modify Castañeda's argument against Hintikka to demonstrate that knowledge *de re* can be neither a sufficient nor a necessary condition for knowledge which contains 'I'. In following section I will explore a peculiar kind of knowledge *de re* which remains outside of the dispute between Castañeda and Hintikka (§ III). I would like to show that it is impossible to reduce Indexical 'I' to this type of knowledge *de re*.

Finally based on the foregoing argument about [IT], I will conclude that the indexical 'I' has no referent, in other words the indexical 'I' cannot be a referring expression. However, according to my view, this paradoxical conclusion is definitely grounded by our common linguistic practice with the indexical 'I'. The indexical 'I' can come into existence only when it accompanies this paradoxical conclusion. Alternately, without necessitating this conclusion the indexical 'I' can never come into existence.